

京都の散歩道 (9) 泰斗による中国歴史研究

今月も読書の秋にちなんで、京大が誇る東洋史学の泰斗、宮崎市定(1901-95)先生と貝塚茂樹(1904-87)先生の名著にスポットライトを当ててみたいと思います。お二人とも「京都支那学」と称された内藤湖南(1866-1934)先生や桑原隲蔵(じつぞう)先生(1871-1931)の最後の弟子にあたります。といっても、筆者自身、せっかく京大に長年いたのに宮崎・貝塚両先生の畢生の研究成果も知らないようではもったいない、恥ずかしいと、今秋遅ればせながら読んだに過ぎないことを白状します。また、中国と台湾そして米国を含めた国際関係が過去になく緊張している今日、その原点に遡ってみるよい機会であると考えたことも読む動機となりました。なお、発行年は以下のようで、両書とも1966年の文化大革命から少し経過したところまでが記述されています。

◆宮崎市定：中国史

岩波全書(上 1977、下 1978) → 岩波文庫(上・下 2015)

◆貝塚茂樹：中国の歴史

岩波新書(上 1964、中 1969、下 1970) → 著作集第八巻、中央公論社(1976)

(なお、現在は岩波新書のKindle版だけが新規入手できますが、古書入手あるいは図書館利用の際は、中央公論社合冊版の方が断然読みやすくお勧めです。)



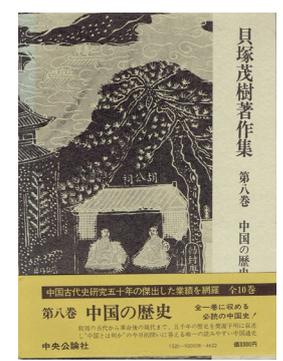
まずは、より大部で多数の図・表・写真や索引も完備している貝塚先生の方から読んでみました。はしがきでは「単に断代史をつなぎ合わせただけで通史はでき上らない。断代史をこえた視点が必要であるからである。それはときに中国をこえて、アジア全体、さらに人類史一般の立場からながめることも必要とする。」、第八巻あとがきでは「通史の記述の困難は何を書くかでなく、何を書かずにすますか、その選択にあると思われる。」と述べておられます。記述は極めて整然として明確で体系的、かつ本文より少し小さめの字で随所に挿入された詳細な項目説明により理解が一層促進されます。この大著から適切にポイントを抽出するのは筆者には不可能ですが、いちばん印象に残ったのは「第一次大戦中の日本の二十一カ条要求を中心とする弾圧政策がもとになって、日中戦争までエスカレートしてきた。二十一カ条を強制した失策の責任はいくら責めても責めたりない。」という強い主張です。



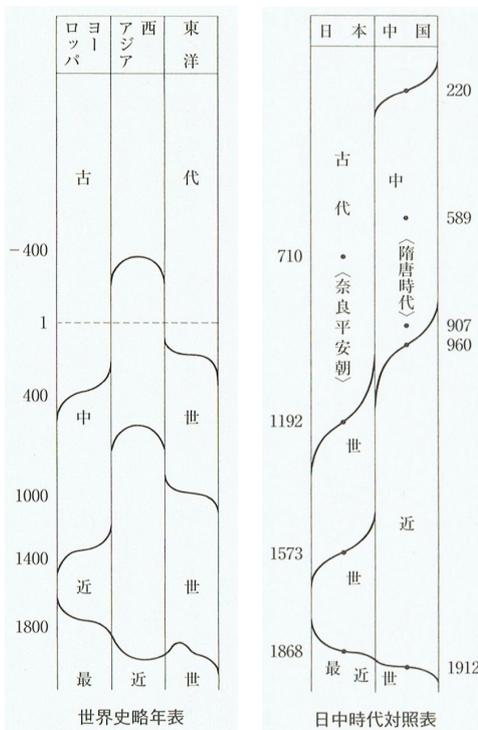
宮崎市定



貝塚茂樹



貝塚先生の本の読了後、直ちに宮崎先生の本に移りました。この順番は正しかったと思います。というのも宮崎先生の本は極めて個性的で、上巻などは、先生が75歳だった1976年9月1日から毎日5枚とノルマを定めて90日で一気に完成に書き上げられた（下巻の解説で引用された1977年1月発行「日本読書新聞」より）ことから理解できるように勢いがあり、体系的に学ぶ教科書のように構成されていないからです。1977年6月に書かれたはしがきには「ここ十数年は学生を持たないから、従って講義したこともない。（中略）私はこの書の読者を、私の学生に見立てて、学生の前で久しぶりに講義するつもりで筆を執ることにした。（中略）私は将来ある若い世代を相手に学問を語りたく思う。」と何とも熱いのです。前出の日本読書新聞には「最初に案を立てる時、有益な本にしようか、それとも読み易い本にしようかと迷った。有益な本とは、学校の副読本などに指定され、授業の進行にあわせて、しづしづ読まされる本のことである。読み易い本とは、歴史学に直接関係しない人でも、大した苦痛を伴わずに、一週間位で読破できそうな本のことを言う。全書本という外形からすると、書店にとっては前者の方が為になるかも知れないが、まかり間違っても受験の参考書にでも利用されると心外でもあり、後者の方に定めた。」ともあります。一方、むすびには「私はこの書を書くに当って、既存の概説書、またはこれに類するものは、他人のものも、また自分のものも、成るべく見ないように心掛けた。（中略）私はなるべく私の記憶だけに頼って、この書中に書きこむ題材を選んだ。もし私の記憶から全く忘れ去ってしまったような事実ならば、それは忘れられるだけの価値しかない事実だ、と判断する自信が私にはある。」とのことです。すごい自信と気迫です。



内容について少しだけ紹介します。「常に世界史を念頭におき、世界史的立場から、最も具体的に個別の歴史研究に取組む用意が必要だ」という主張は貝塚先生と軌を一にします。そして、「時間と空間が織り成す座標軸の広さ」を問題とし、先生が考案された略年表が左図です。古代、中世、近世、最近世の四分法に基づき、時間差を伴って世界全体が関連していて、さらに中国と日本の関係だけに注目すると、近世に入るまでは中国が先行したものの最近世では逆転したことを示しています。先生は、ソルボンヌ大学、ハーバード大学、ハンブルク大学、ルール大学に客員教授としても招聘され、正に世界的な視点で東洋史学に関する研究を深められたといえます。



両書刊行後半世紀近く経った今日、アメリカと中国を中心とする世界展開となりました。両書から学んだ視点で考えなおしてみたいと思います。 編集人